
魔法少女フルメタルなのはストラトス・ふもっふ！！

ユーリ・ローウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女フルメタルなのはストラトス・ふもっふ！！

【Nコード】

N4248T

【作者名】

ユーリ・ローウェル

【あらすじ】

夏休みのある日、宗介とラウラ気づくと知らない世界に来ていた。そこで出会うのは魔法と言っ力だった。

これはインフィニットストラトス・ふもっふ！！の外伝小説です。

第1話・気づいたら異世界？（前書き）

息抜きでやってしまいました。ちなみに宗介とラウラは地球での時間は三日くらいしか経ってないという設定です。

ふもつふ側での登場は今の所、宗介とラウラと束の登場予定ですがまだ増えるかもです。

第1話・気づいたら異世界？

「なあ宗介。ここは一体どこなんだ」

「それは俺が聞きたい」

会話している人物。そう、ある物語の二人の主人公であった。男の方の名前は相良宗介、簡単に言うとミリタリー高校生でアホその1、そして、もう一人の女性の方の名前はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生でアホその2である。

今、彼らがいるのは何処かの列車の上。それだけなら何ともないのだが、空の先に見える月が何と二つあるのだ。

すると、近くの方で何かが爆発する音がする。宗介とラウラは爆発音がした所に向かう。

そこにいたのは青い色の髪をした少女とオレンジ色の髪をした少女がいた。二人の格好は戦闘服と言うには到底思えないような…言うなら”魔法少女”と言う単語が何故か宗介とラウラの脳裏に浮かんできた。

「宗介」

「ああ」

宗介はレーバティン、ラウラはシュヴァルツアレーゲン・アルピオンを取り出して戦闘に介入をするために二人の少女の所に向かう。いきなり現れた宗介とラウラを見た二人の少女は警戒をするようにいつでも動けるような体勢を取る。

「あなた達、今この周囲は作戦行動中で立ち入り禁止な筈です」

オレンジ色の髪をした少女が持っていた銃を宗介に向けるが、少女の背後に敵がいる事に気づいた宗介は素早くボクサーを取り出し撃つ。

「戦場で他の事に気を取られると死につながるぞ」

「その二人、話しは後ですから今はそのへんてこなロボを殲滅するぞ」

そこで改めてレーバティンとシュヴァルツアレーゲン・アルピオンを見る二人の少女。

「ねえティア。あれってロボット！！かっくいいね」

「バカ言わないの。あれは質量兵器じゃないの、一体何者なの……」

二人もそう言いながら自分達の戦いをする。

「あらかた片付いた。それにしても何だこのロボは、アマルガムの物でもない……」

「宗介、あれ！！あれ！！」

「どうしたラウ…ドラゴン？」

ラウラに指差す先にいたのは何と白いドラゴンが飛んでいたのだ。

5

「ハンティングを……」

「落ち着け、それよりさっきの奴らに話しを聞かねばならないな」

宗介とラウラは二人組の少女たちの所に向かう。

「改めて聞きます。あなた達は何者なのですか？」

「ハッ！自分は相良宗介軍曹であります」

「私はラウラ・ボーデヴィツヒ少佐であります」

「…はい？」

勢いよく自己紹介されてオレンジ色の髪の少女は盛大にずっとこけていた。

「私はスバル・ナカジマ二等陸士です」

「バカスバル。何呑気に自己紹介してるのよ…はあ、私はティアナ・ランスター二等陸士です。それよりあなた達はどうしてここにいたのですか？」

「それは俺が聞きたい。まずここは一体どこなのだ？」

そこでティアナは思った、この二人はもしかしてこの世界に人ではないかと。

「どうかしたの？スバル、ティアナ？」

ここで、空から一人の女性が飛んできた。その女性も”魔法少女”的な格好をしていた。そして…

「篠ノ之博士に…」

「東お姉ちゃんに…」

「声がそっくりだ」

宗介とラウラの第一印象はそれだった。普通の人ならば「人間が浮かんでる」的な事を考えるが、この二人は大分ずれているので仕方がないだろう。

「なのはさん。この二人、もしかしてミッドの人間ではないかもしれません」

「そう…あの〜ちよつと聞いても良いですかっすすみません。私は高町なのはと言います」

「ハッ！自分は相良宗介軍曹であります」

「私はラウラ・ボーデヴィツヒ少佐であります」

今日のこの二人はやたらとテンションが高いようで、高町なのはと名乗る女性はちよつと困ったような顔をする。

「では聞きます。あなた達は何処から…何処に住んでいました？」

「自分は多摩の方に」

「私はIS学園の寮…地区で言うと三鷹の方かな」

「えっ…じゃあ、あなた達は地球から来たんですか？」

「「????」」

高町なのはが言った意味が理解できない宗介とラウラは首をかしげる。

「うーん。ここで話しをするのもあれかな。じゃあ今から二人を私達の隊舎に案内しますのでそこでお話しをさせていただきます」

「それは助かります」

その後、宗介とラウラはへりに乗り。中で十歳位の少年と少女、それと金髪の女性に出会う。少年少女の名前はエリオ・モンディアルが少年、少女はキャロル・ルシエ。そして金髪の女性はフェイト・T・ハラオウンと言う名前だ。

へりは数十分で目的地に着く、ちなみに宗介とラウラはへり内で爆睡をしていた。見知らぬ所で爆睡とは神経が図太いこの二人しかできないだろう。ティアナなど、人がいなくなったら張り倒してそうな顔をしていた。

「…着いたのか」

「眠いのはふわぁ」

「あはは。では私について来て下さい」

高町なのはに連れられる宗介とラウラ。隊舎に入ったと時の第一印象は綺麗と職員が若いと言うことだった。少し歩くと目的の所に着いたよう。高町なのは立ち止まりドアにノックをする。

「作戦中に保護した二人を連れて来ました」

「はい、どうぞ」

高町なのははドアを開けると中に入り、宗介とラウラも中に入る。そこにいるのは高町なのはとあまり変わらない位の少女がシステムチェアに座っていた。

「初めまして。私はここ”機動六課”の隊長の八神はやてです」

「ハッ！自分は相良宗介軍曹であります」

「私はラウラ・ぼーび…ボーデヴィツヒであります」

三度目の自己紹介、しかもラウラは名前を噛んで顔を真っ赤にさせる。

「ぷっ…失礼。あなた達二人の事はあらかじめ高町なのは隊長に話しを聞きました」

「では、一つ質問を…ここは何処なのですか？」

「うんその前に一つ…あなた達は”魔法”って信じますか？」

「魔法…魔法とはあれか？イオナズンとかベギラゴンとかのやつか！？」

「いや違うかもしれない。ここはファイガやサンダガとかかもしれない」

「いやいや、ここはジャツジメントとかエンシェント・ノヴァの方かも知れんぞ」

「えっ…えくと、話しを続けても良いですか？」

ここで八神はやてはこのままでは埒が明かないと感じて無理やり話しの流れを戻す。正直、このままだと本当に埒が明かなくなる所だった。

「魔法と言うのはあなた達が思っているのとは少し違います」

「では、どのような物ですか？」

「じゃあ、ちょっとやってみます」

そうすると八神はやての指先が光、宗介の両腕を光の輪で縛るのであった。

「こう言うのが私達の魔法です」

「なんだあ。つまんない……」

予想してたのより余りぱつとしない魔法にラウラはショックを受けたような表情をする。

「ま、まあこの力を使って犯罪者を取り締まるのが私達”時空管理局”で、ここはそのなかの機動六課と言う部署です。それでこれからあなた達二人は私達が保護をしようかと思うのですが……」

「俺は八神隊長の案に賛成です」

「私もだ、ここが地球では無いとなるとどうにもならないからな」

「ありがとうございます。あと、この世界の名前は”ミッドチルダ”と言います。それじゃあもう一つ聞いてもよろしいですか？」

「何でしょうか？」

「あなた達が使っていた”デバイス”は何ですか？」

聞き慣れない単語に宗介とラウラの頭上に????が浮かび上がる。

「デバイスってなんだ？」

「えっ…あなた達が使っていた物ですよ」

「?、俺達が使ってたのはこれですが」

宗介はポケットから”サモンカード”を取り出して八神はやてに手渡す。

「これは？」

「アル。アーバレストを出してくれ」

『ラージャ』

すると、宗介の横にアーバレストが現れたのだ。それを見て八神はやてはビックリする。

「これは質量兵器ですか？」

「質量兵器がどのようなも分かりませんがこれが先ほどのとほぼ同じ物です。これはASアムスレイブと言う物です」

「私が使っていたのはISインフィニット・ストラトスと言う物だ」

「うん。本来なら質量兵器はあかんやけど…面倒だし、ここは問題なしって事でっ…」

素が出てしまった八神はやてはあわててっつと言っ事は無くてそのままの調子で話す。

「ごめん〜これがウチの素なんや。二人も余り気にせえんでな」

「了解した」

「私はいつでも素だぞ〜」

「まあ、堅い話しはこんなもんで。あとでなのはちゃん達にも自己紹介しておいてな」

「それよりはやて。お腹が空いたぞ」

「よし、私が案内したる」

元気に部屋を出る八神はやての後に続く宗介とラウラ。この夏、二人の思い出の中の一ページがこうして始まるのであった。

第1話・気づいたら異世界？（後書き）

勢いで描いてしまったものです。まあ、更新は本編が夏休みに入るまではのんびり更新になります。

第2話・体力はちゃんとつけよう(前書き)

なのはが少し壊れます…

第2話・体力はちゃんとつけよう

機動六課の隊舎は新品と同じと言っても良いほど綺麗である。その理由はこの部隊が発足してからまだ余り時が立っていないからと言うのが一つの理由である。

八神はやての後について行く宗介とラウラ。すれ違う人一人見ても若い人ばかりで部隊なら必ずいるだろうベテランの姿がない事に宗介は疑問に思った。

そうこうしている内に二人は大きく広がった所に出た、そこはどうかやら食堂のようだ。ちょうどそこには先に昼食を食べている先ほどのメンバーがそこにいた。

八神はやては早速集まってる所に向かい、宗介とラウラもそこに向かう。そそして、向かったテーブルの上にある食べ物の量に驚く。それは、山もりのパスタ三つ分はあるのではないかと言う位の量だった。その量を食べているのはスバルとエリオの二人だった。だが、二人はインデックスと言うシスターに出会っているので驚くが、それまでだった。

「では。私達も食べる事にしよう」

「そつだな」

二人は食堂に注文しに行く。ちなみに六課の食堂はやはり社員食堂と言うこともあり値段は安めである。

昼食を食べた後、高町なのは午後の訓練をするためにティアナ達四人と六課内にある訓練スペースと言う所に行くようだったので宗介とラウラも見学をしに行くことになった。八神はやてはそのまま隊長室に戻って行く。

「これがこの世界かの力、魔法か。宗介から見てどう思う?」

「そうだな…やはり…」

「あれは魔法じゃないな」

見事にはもった。今二人は高町なのはとフォワードと呼ばれる四人の訓練を見ている。二人は魔法と言う物を見て改めて思った事を口にしてしまった。

それは無理も無い。魔法とはイメージからしてファンタジーの部類に入る。それが目の前ではバリバリの自分達よりの”科学”に近い動きをしていた。

「中々の動きだが…甘いな」

訓練は出撃後との事で早めに終え、今は五人が集まって訓練の話し

をしていた。

「少しいいかよろしいでしょうか？」

「どうしたの相良君？」

「言いたいことがあるのですか？」

「うん、いいよ」

宗介はティアナ達を見ると口を開く。

「今の訓練を見ていて思ったことがある。スバル・ナカジマ。お前はインファイターでありながら単純すぎる、もう少しフェイントやら動きを変える。ティアナ・ランスタール。お前の視野はもつと広い筈だ。まずは冷静を保つことが第一だ。エリオ・モンディアル、キヤロ・ル・ルシエ。お前達はまずは戦場の空気を感じて自分が生き残る事を考える。そして最後に高町一等空尉。あなたはまず基礎体力が必要だ。俺の見立てではスバルやティアナより体力がないと見る」

「あは、あははは」

宗介に凶星を着かれてから笑いをする高町なのは。

「では、これから体力テストをやる」

その後は魔法を一切使用しない、純粋な体力テストが始まる。50メートル、持久走、反復横とびなど学校でやるようなテストを行った。

一通り終わると宗介は結果をすぐにまとめて発表をする。

「結果がいい順に発表する。まずはスバル、お前は体力などは十分ある。問題はない」

「えへへ」

「次にティアナ・ランスター。基礎体力は十分にある。問題はない」

「そう、ありがとう」

「そして次に…エリオ。お前はまだ十歳だ、これからまだ伸びる。頑張れ」

「はい!」

ここで、まだ名前を呼ばれていないのはキャロと高町なのは二人だった。なのははショックを隠しきれないでいて、それをどうリアクションすればいいのか分からないキャロであった。

「次にキャロ。お前もエリオと同じだ。これからまだ伸びる。頑張

れ

「はい、ありがとうございます」

「そして最後、高町一等空尉。あなたのは…かなり頑張るべきかと…」

「ちょっとまって。スバルやティアナにわ負けると思ってたけど、キャロにまで負けたのは納得いかないよ」

ここでなのはは涙目で宗介に訴えてきたのだ。それを宗介は五人のデータを見せる。なのはとキャロの能力値は殆ど同じであったが、長座体前屈の所でのなのはは負けていたのだ。

「高町一等空尉は体が堅いようです。その差でキャロに負けました」
「そんな」

エース・オブ・エースと呼ばれた高町なのはが撃沈した瞬間であった。

「今日はこれまでだ。解散!!」

そして、いつの間にか宗介がその場を仕切っていたのだ。フォーの四人は撃沈してるなのはを慰めていたが、なのはは考え事をし

ていた。

(うつゝ今まで魔法に頼り切ってた所が今に帰ってきた…でもまずいよね……よし)

なのはがばつと復活をして宗介の前に立つ。

「相良君。明日から私の代わり教導して、そして、私も一緒に教導を受ける。いいかな？」

なのはの発言にフォワードの四人は驚いていた。それは教導隊でも有名な高町なのはが教導をする方ではなく、される側に回ると言う事だ。

「自分は構いませんが…」

「なら、明日からよろしくね。よし、頑張るぞ」

なのははそう言いながら元気よく隊舎に戻って行く。

「これは面白そうだな」

「明日からなのはさんと一緒に訓練だ」

この光景に呑気なラウラとティアナ。

「はあ。これからどうなるのよ……」

この先、どうなるのかと考えるティアナ。

「宗介さんの訓練ってどんなんだろう？」

「楽しみだねエリオ君」

完全に楽しみにしてる少年少女であった。

第3話・宗介、教導官になる。

次の日の朝、六課の訓練所にはフォワードの四人と教官の高町なのは、それに宗介とラウラがいる。

しかし、宗助とラウラがいる事以外で違うことがある。それは高町なのはの服装である。

彼女は教導官の立場にいた時は訓練時の格好はバリアジャケットと言う格好だった。

だが、今の彼女の格好はフォワードと同じ訓練服を着て隣に立っている。ちなみにラウラも訓練服を着ている、逆に宗介はミスリルで着ている服で胸のあたりに「S R T」と描いてある刺繍が施されている。

「では、今日から俺の訓練を始める。各自、デバイスを俺に預けるように」

宗介の発言にデバイスを持つ五人は宗介にデバイスを渡す。

「よし、ではこれから基礎訓練を始める。まずはランニングだ」

フォワードの四人と高町なのはとラウラは訓練所の周りを走り出すと宗介も走り出した。

走っている順は前から宗介、次に同じペースでラウラとスバル、そ

の後ろにティアナが走る。その少し離れた所にエリオ、更に後ろに高町なのはとキャラロが走っている。

この順番は簡単にいえば体力がある順を表している。知っている人もいるかもしれないが、持久走は宗介の独壇場だった。先頭を走る宗介と一番最後に走っている高町なのはとキャラロの差はかなり離れている。

ランニングは三十分。最初は走っていたがエリオとキャラロと高町なのはだったが、体力がない彼等は所々で歩きながらになっていた。エリオとキャラロはまだ十歳なのでしようがないが、高町なのは：女子大生と思えば違和感はないだろう。

「高町一尉、エリオ、キャラロ。最初は所々であるいても構わないからそれでも足だけは止めるなよ」

宗介は本来ならば、ミスリルでやるような訓練をしよう考えていたが、十歳の少年少女がいる為に宗介は少し方法を変える事にしたのだ。

「よし、息が整ったら筋トレを始める」

筋トレの内容は腹筋、腕立て伏せ、スクワット、反復横とびなど基礎的な内容であった。

「はあはあ……」

筋トレが終わると、各々は息を荒げて地面に座り込む。体力に自信があるスバルもこれには地味に疲れるようであった。

「よし、これで朝練は終わりだ。朝飯を食べた後は戦闘の訓練を行う。以上解散」

「ふう〜疲れた」

「本当よね。それにあいつ、私達と同じ距離走ってたのに全く息切らせてなかったわね。あいつ化け物なの？」

「宗介は体力バカなんだ。だからこう言った持久走はあいつは無敵だぞ」

比較的余裕がある三人は座りながら話している。そしてエリオとキヤロは喉かからからなので水を飲みに行っている。そして…

「きついです〜」

一番年上で階級も上な高町なのは死んでいた。元々魔法が無ければ唯の女で彼女にはとても辛い訓練だろう。

そう言いつつも、エリオとキヤロが戻ると隊舎に戻り、朝食を食べ

るのである。宗介もいたの一緒だったようだ。

朝食を食べた後は再び訓練所に戻る。そこには赤毛の少女が訓練所にいた。

「おせーぞ。さっさと準備しろ」

赤毛の少女はそう言うが、初めて見る顔の宗介とラウラは頭の上を上げる。

「まだ紹介してなかったね。この子はヴィータちゃんって言うんだ」

「なのは、こいつらが昨日保護した奴らなんだな。まあいい、あたしはヴィータ、階級は三等空尉だ」

「自分は相良宗介軍曹であります」

「私はラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。階級は気にするな、私は気にしていない」

有名な台詞をドヤ顔で言うラウラ。

「自己紹介はこれまでだ。訓練をはじめろぞ」

ヴィータがそう言うが、宗介は預かっていたデバイスを返し、皆の前に立つ。

「よし、これから基本的な戦闘訓練を始める。まずは力量を見たいからチーム戦を行う。チームはAチーム、ティアナ、キャラ、ヴィータ、ラウラ。Bチーム、スバル、エリオ、高町一尉、そして俺だ」

「ちよつ、何でテメエ が勝手に仕切ってるんだよ。それに模擬戦 ってなんだよ!!!」

ヴィータは怒鳴るが、高町なのはが事情を説明するとヴィータは渋々納得する。

その後、後々のチームに別れて作戦会議を始めようとする...

「すまない。模擬戦のルールを言っていなかった。今回は空戦は禁止、原則として陸戦のみとする。ただし、スバルのウイングロード、キャラのフリードの使用は許可する」

模擬戦と言う事で、高町なのははやる気を出していたが、宗介の「陸戦禁止」の一言でどうしようと思うのであった。

この理由は、空戦を主体とする高町なのはや、ここで言うとヴィータでもあるが。彼女等は基本、魔法っを使って空で戦っている。それは陸戦も少しはやっているが、スパロボ的表示をするならば地形対応Bである。

結果を書くとき長くなってしまつたので、結果だけ言おう。この模擬戦は各々の力量を見るのが主体なので勝敗は無いに等しい、普通なら高町なのはがいる方が勝つと思われるが、空戦禁止が効いていてテイアナに上手く巻かれていたのだ。こうなると宗介は相手にラウラとヴィータがいるのが辛いところであるが、宗介も冷静に指示を与えスバルとエリオを動かしてヴィータを抑え、自分自身はラウラとキャロの相手をしていた。まあ、この模擬戦は勝敗にはこだわらないので結果は無いような物だった。

結局少し長くなるが結果はドロー。ドローになった理由は宗介のアーバレストとラウラのシュヴァルツエアレーゲン・アルビオンの戦いが決着がつかなかったためである。

その模擬戦は午後も行われ、終わった時は全員疲れ果てていた。

「予想以上に疲れたな。今日の訓練は以上だ」

そう言うが、時間はまだ16時だった。だが、朝から動いていたらこの辺が限界だろうと思つた宗介は早めに切り上げたのだ。

宗介はその場で皆の動きを簡単にまとめていた。そこにヴィータが話しかけてきた。

「なあ相良。おめえが使つてたアーバレストって今更だが何なんだあれは？」

ヴィータが先の模擬戦で宗介とラウラが使っていた物に疑問が浮んだ。これはヴィータだけではなく、事情を知っている高町なのは以外、つまりフォワードの四人も思っていたことなのだ。

宗介は自分の世界には、AS、IS、MS、そしてバルキリー等があると説明をする。説明を聞いていた者たちは驚きを隠せないでいた。

「成程な。お前らの地球ほどやたらあたしらの地球とは大分違うよ
うだな」

ヴィータは何処か納得したかのような感じを残しながら隊舎に戻って行った。

「他には質問は無いか？」

「特に無いわ。はあ、まさか本物のロボットが実在し、それが人型
サイズになるなんてもう私は驚かないわよ」

「ティア。私はもう驚きすぎて声が出ません」

「私もです」

「僕もです」

フォワードの四人はそんな感じだった。

「では、俺はこれから整備室に向う」

「ああ。わかった」

宗介は機動六課の整備室に向かう。整備室と言うのは簡単に言うと魔導師が使うデバイスのメンテナンスルーム、それと出撃の際に使う足であるヘリなどを整備する所なのである。

整備室にはアーバレスト等を整備する環境があり、宗介はその場所を昨日八神はやてに聞くなりすぐに行ったようだ。その際にヘリパイロットのヴァイス・グランセニックと言う男と出会っている。

こうして二日目は何事も無く無事に終わることが出来た。そして次の朝、宗介以下昨日の全員は早朝訓練のために訓練所に向かう。だが、皆は訓練所の真ん中に一人の女性が倒れているのに気づく。

「俺が見て来る。お前達はここで警戒して待っている」

宗介は恐る恐る女性に近づく。そして、宗介が女性の顔を見ると信じられないものを見たような表情をする。その事に疑問を抱いたラウラも宗介の隣に行き、女性の顔を見て驚く。

「何でこんな所で寝ているのだ東お姉ちゃん…」

そう、その女性は篠ノ之箒の姉の篠ノ之束であった。

第3話・宗介、教導官になる。（後書き）

なのはが弱すぎると言われるかもしれませんが、なのはに空戦を禁止すればこのぐらいではないかと思っています。

次回、訓練所に現れた束。そして、高町なのはと篠ノ之束が会ったとき、高町なのはに新たな力が…ってなるかもしれないです。

「もう私の出番はいつになるのですか」

「はっ、申し訳ありません大佐殿！」

「私は大佐じゃなくて曹長です」

「申し訳ありません曹長殿!!」

第4話・不屈の魂（前書き）

束登場。そしてなのはこ…

第4話・不屈の魂

あれから宗介はフォワードの四人とラウラを残し、なのはと束と一緒に隊長室にいる。

「私はここの隊の隊長をしています八神はやてといいます」

「私は高町なのです」

「私は篠ノ之束さんです。今は中学の教師をしてます」

なのはとはやてと束は自己紹介をする。

「えっと篠ノ之さん。あなたはどのようにして訓練所にいたのですか？」

「うーん。気づいたらあそこにいたって感じかな」

「はあ…そうなんですか」

「自分は一つ補足します。篠ノ之博士はISのコアを開発した人物でもあります」

「ISってあのラウラがついてるやつ？」

「まあ、私はコアだけだね。あっ、そうだ。私のISを見せてあげるよ」

束はポケットからカードを取り出し。宗介は隣にいたなのはを少し離れると言つと束はカードを天井にささげ。

「レイジングハート、レディ！」

束は一瞬でISに包まれる。その形、色はまるでRX78-2ガンダムに似たカラーリングをしていた。

「れ、レイジングハート？」

驚いたのは高町なのではあった。まあ、その理由は大体分かるが…

「束さんのISもレイジングハートって名前何ですか？」

「もってどう言つことかななのちゃん？」

「私のデバイスの名前もレイジングハートって言つんです。今から見せますね。レイジングハート」

なのはもその場で白いバリアジャケットを纏う。

「すごいいなのちゃん。殆ど私のISと色とかが似ているね。束さんビックリだよ！」

「私もですよ束さん」

「はあ…では篠ノ之束さん。あなたを今から相良君達と共にこの機動六課が保護致します」

「ありがとう。ねえなのちゃん。ここに整備室とかない？」

「ありますよ」

「じゃあ、そこに案内して!!」

「わかりました。じゃあ八神部隊長失礼します」

なのは束が走らないように腕を掴みながら隊長室を出て行き、隊長室には宗介とはやてのみとなる。

「その…色々とすまん」

「あはは。なんか束さんって嵐の様な人だな」

「俺は何故かあの二人が何となく似ているような気がするのだが…」

「それはあれやないか？声がにてるからとか」

「かもな…」

二人は正直、なのはと束が会話をしている時、同じ声にしか聞こえないでいたのだ。

「では俺も整備室に行ってくる」

「よろしくね」

「では失礼する」

宗介も隊長室を出て整備室に向かう。

整備室に着いた束となのは。整備室は今現在もへりやら色んなものを整備している最中だった。束は邪魔にならないように空いてるスペースに向かう。ちなみに二人はちゃんと元の服の格好だ。

「なのちゃん。君のデバイス少し見せてくれるかな？」

「デバイスならデバイスルームの方がいいのですが…」

なのはは悩んだ。デバイスルームはデバイスの機密が保管されている場所で、そこに案内しても良いのかと悩んだか、束を見た瞬間”

この人なら大丈夫かな” という気持ちが出て、デバイスルームに案内したのだ。

「ここがデバイスルームで。ではではなのちゃん、早速デバイスを見せてくれるかな」

なのはレイジングハートを束に渡すと束はデバイスルームのパソコンでレイジングハートのデータを見る。もちろんデータはなののは許可を得ている。

「ふむふむ、なのちゃんのスタイルは長距離からの砲撃に回避ではなく防御が得意なんだね。じゃあ…」

鼻歌をしながらキーを叩き、ポケットからサモンカードを取りだすとカードをパソコンにつないで何かのデータを入れたのだ。

「束さん。何のデータを入れたのですか？」

「ふっふっふっ。それは後のおたのしみ。それにしても魔法がある。私も魔法使いたいな」

すると、デバイスルームの扉が開かれ。扉から宗介が入ってきた。

「あつそー君。ちょっとこっち見てくれるかな？」

宗介は束の横に立ち、モニターを見る。

「ここはどうすればいいかな？」

「ここはこれの方が…」

「えっと。そこはこうした方が…」

なのはは何をしているのかわからないでいたが。モニターに映っていた武装を見るなりなのはも意見を言う。彼女は武装隊にいたことがある、その過程でいろんな…ここで言うのとデバイスになる。それを色々と実験等をしたことがある。その経験と癖でいつの間にか三人で色々と案を言いだしていた。

「ふ〜とりあえずこんなもんかな。なのちゃん。さっき私がいた広い所でこれ使ってみて」

束はレイジングハートをなのはに渡すと三人は訓練場に向かうためにデバイスルームを後にした。

訓練場はフォワードの四人とラウラがランニングをしていた。ヴィータは他の仕事のため今日はいない。

「よし。一旦集合！」

宗介が号令を出すと走っている皆は宗介の所に集まってくる。

「おっと、訓練中にごめんね。私は篠ノ之東、さっきここに保護されたものです。ではではなのちゃん」

なのは前に出てレイジングハートをに手にする。さっきまで訓練していた皆は何をするのかと言う目でなのはを見る。

「レイジングハート、セツエトアップ！」

なのはのいつもの台詞。フォワードの皆は何度も聞いたことのある台詞にこの後のなのはの変化も知っているためあまり注視して見ていなかった。が、次の瞬間、その考えは変わってしまう。

そう、なのはの格好はバリアジャケットの格好ではなく…

「ええ〜これって…」

「そうそう。なのはちゃんのレイジングハートにISのコアを入れてみたの」

機械的な鎧、その色はバリアジャケットと同じ色。手にはいつもの杖の様な武装、しかし、前の時よりカラーリング、引き金の追加など細かいところが変わっていた。そして背中にはビッド見たいのがあった。

「この武器ってさっきの…」

「ああ。その通りだ」

なのはが言っているのは手に持っている武器の事をだ。これは先ほど色々と意見を言い合っていた中の内の一つであった。

「なのはちゃんもそれ出した事だし、今から私と一回戦ってもらおうとしますか。レイジングハート、レディ!!!」

すると束もISを展開させる。展開させると手にはなのはと同じような口径が大きいライフルが握られていた。見た目はなのはと同じだが、背中には鉄の羽の様なものがあつた。

「これが私の”レイジングハートエクセリオン”。そして、なのはちゃんの”ブラスターレイジングハート”、二つ同じ名前だとかやこしいから名前変えてみたけど…だめだったかな？」

「いいえ、大丈夫です。じゃあ早速」

「そだね」

二人は上空に飛び上がる。その姿は何処か似ていてやはり違いが見れる。だが、今日と言う日に”不屈の魂”と名のついたISが生まれた日でもあったのは確かな事だろう。

高町なのは、ミッドチルダ内で有名なSオーバー魔導師、エース・オブ・エースと呼ばれている彼女がおそらく世界初であろう魔法とISと言う科学の力が融合した力を入れた。

それは、彼女にとって今までにない刺激のある生活の始まりでもあった…

「うわぁ。なのはさんかっこいい〜いいな〜私もあれほしいな〜」

「おバカなこと言わないのスバル。でも、確かにかっこいいわね。あの白にブルーのラインとか」

「でも。私のシュヴァルアルビオンの方がかっこいいぞ!!」

「僕は全部カッコイイと思いますよ」

「私は…ラウラさんの方がカッコイイかと…」

二人のISを見た五人はそんな事を言っていた。

第4話・不屈の魂（後書き）

なのはにISを展開させてしまいました。ちなみに東の方のレイジングハートの背中と羽と言うのはV2ガンダムの羽を想像してください。

次回、六課に任務が下される。その任務地はホテル・アグスタ！

あっ、でもティアナはこの小説では暴走はしませんよ〜

第5話・ホテル・アグスタ？（前書き）

タイトルだけ見れば次はOHANASHIの話に繋がるんじゃないかと思いますが。今回はかなり話が変わります。これはたぶんあまりないような形になるのではないかと思います…

第5話・ホテル・アグスタ？

さて、なのはがISを手に入れて二日が経過した。宗介の訓練の内容に新たに”機動兵器の勉強”と言う項目が増えた。まあ、簡単にいえばASやIS、MSの事についてそれぞれの特性等の教える時間になるのだ。様は言葉だけで単にアニメを見る時間になっていたりもしている。ちなみにアニメを持ちだしているのは当然ラウラである。

「む…今度やるホテル・アグスタでのオークションに発売して一月の内に売り切れになりその後の生産がされなかつたと言っ1/60サイズWガンダムのプラモが出るだ…これは行かねば」

「アンタ何アホなこと言っているのよ。それにその日は普通に訓練でしょう」

「ふむ…これは伝説と言われたルアー”オルカイザー”。釣り好きの者ならだれもが欲しがるとアレか…是非手に入れておきたいものだが…」

「宗介」

「ああ」

二人は同じタイミングで椅子から立ち上がり何処かに行ってしまうのであった。

「私、激しく嫌な予感しかしないんだけど…」

この日、部隊長の八神はやての元に休暇届けが出された…宗介、ラウラ、なのは、フォワードの四人の名前が書かれてあった。

そして、二日が経過した。今日はホテル・アグスタで行われるオークションがある日だ。そして、六課のいつものメンバーは隊舎のロビーに集められていた。

「では、今日はお前達にある任務を言い渡す」

宗介が言うと、ラウラ以外はなんだろうと首を傾げる。

「今からこの場にいる者及びヴァイスはホテル・アグスタに向かう」

「それって護衛任務だよね？」

なのはは部隊長であるはやてに六課にアグスタ護衛任務があると聞かされたのだが…

「いや、単に俺達はオークションに参加するだけだ」

「ようは今日は休暇と言う事だ」

「はあ、ちよつと宗介。アンタ何言っているのよ!？」

「何をと言われてもな。お前達の休暇届けは俺がちゃんと出しておいたから安心しておけ」

「だからそう言う意味ちゃうでしょうがこのアホソースケ!!」

ティアナはどこからともなく出したハリセンで宗介の頭を思いっきり叩く。

「痛いぞティアナ」

「うっさい」

「まあまあティア。でも休暇か、よく考えれば久しぶりかも」

「僕は初めてですよ」

「私もです」

「と、言う訳だ。今から一時間後に用意をしてこの場所に集合だぞ」

ラウラが言うとフォワードの四人は自分の部屋に戻って行った。

「宗介君。これって私もなのかな？」

「そうです高町一尉」

「そつだぞなのは。お前聞いた話じゃかなり働いているでは無いか、その歳でワーカーホリックは洒落にならないからな」

「でも。護衛任務はどうするの？」

「それは篠ノ之博士が受けてくれました」

「東さんが…」

「だからなのは。今日は私達の任務…と言う休暇を楽しもうではないか！！」

正直、オークションを楽しみにしているのは宗介とラウラのみなのだが…

「そだね。たまには私も休まなくちゃね。ねえ二人とも、オークションが終わったらどうするか考えてるの？」

「そつだな…折角休暇を取っているからな。オークションが終わる次第と言う事だな」

なのはも自室に戻り。それから一時間後、皆は私服を着てロビーに集まっていた。ちなみに宗介の私服は陣代高校の制服だった。

「うっし集まったな。車は俺が運転するから早く乗りな」

車の運転手を務めるヴァイスは皆を乗せると六課を後にするのであった。

「それにしてもなのはさんと一緒にこうして何処かに行くとは思いませんでしたよ」

「にははは。私もフォワードの皆やヴァイス君、それに宗介君やラウラちゃんと一緒に休暇を取るなんて思わなかったよ」

「まあ。今日は折角の休日ですから思いっきり楽しみましょうぜ」

「そっだね」

車内でそんな会話をするのはとヴァイス。他の皆はオークションの出展予定の物を見ていた。それから一時間位でホテル・アグスタに着いた一同は受付を済ませると皆は席に着く。

「あれ、なのは?」

「フェイトちゃん」

席に座っていたなのは横をライトニングス隊長のフェイト・T・ハラオウンが通り、なのはに気づいたようだ。

「はやてに休暇って聞いた時は余り気にしなかったけどまさかここに来ているなんて」

「あはは…私も今日の朝いきなり宗介君に言われたんだ」

「そうだったんだ」

そこに、奥の方に座っていたエリオとキャロがフェイトに気付きやつてきた。

「フェイトさん。どうしてここにいるんですか？」

「今日はここの護衛任務で来ているんだよ」

「あっ…そうなんですか」

キャロはバツが悪そうにするが、フェイトは「大丈夫だよ」と言う。

「じゃあ私は行くね。皆は休暇楽しんでね」

そう言うとフェイトは仕事に戻って行った。

『ではこれより。オークションを始めたいと思います』

司会者のアナウンスでオークションが始まった：

「いや、色んな物が出てきて楽しかったねティア？」

「ええ、そうね。私オークションがどんなものか知らなかったけど意外に凄かったわね」

「はい。もう皆さん欲しい物のために頑張っていましたからね」

「相良さんにラウラさん、ヴァイス陸曹も頑張っていましたね」

オークションが終えた後、フォワードの四人は各々の感想を言い合っていた。

「これがオルカイザーか。これで俺の釣りの幅が更に広がるな」

「これが幻と言われたWガンダムのプラモか：帰ったら早速作るぞ」
「まさか、熱気バサラが使っていたギター出て来るとはな。でもこれは自慢出来るぞ」

「あはは。皆嬉しそうだね」

そう言っているのはもレアPC”IBN5100”を手に入れていたりする。えっ？何で熱気バサラの事やレアPCがあるかって？そこは深く考えてはいけないよ。

「さて、丁度昼飯時か。んじゃこれから昼飯にしますか」

「そつだな」

宗介達は車に乗り、市街地に向かって行ったのだ。

「はやて。結局何も起きなかったね」

「そやね。まっ、厄介事が起きないのはええことやし。それにしてもフォワードやなのはちゃん達が羨ましいで」

「えゝ束さん的には何かイベントが起きてくれた方がよかったのかな」

「東さん。そんなこと言わんといてな」

「そうですね。はやて、東さん今度、休暇取って皆でどっかに行こう」

「そやな」

「その時は色々と案内期待してるよフェイトちゃん」

護衛していたははやて達も何も起きなかつたので直ぐに任務終了して六課に戻って行った。

第5話・ホテル・アグスタ？（後書き）

まさかなのは達がオークションに参加する方になる話でした。この形はあまりないのではないのでしょうか？

まあ、このせいでOHANASHIフラグは完全にどっかいつてしまいましたがね。

余談ですが、オルカイザーと言うのはグランダー武蔵と言うアニメに出てきたイルカの形をしたルアーです。まあ、これは勢いで出したものなので登場はもうないですね。

リン

「うー今回も出番がなかったですう」

ソースケ

「すみません大佐：曹長殿」

リン

「ぷう〜。まあ仕方ないですね。では次回の予告おねがいますです」

ソースケ

「今回はアグスタの続きで簡単に言えば休日の内容なるな」

リン

「とのことです。一体いつになったら私は本編に出られるのでしょうか？」

シグナム

「……」

シャマル

「……………」

ザフィーラ

「私はいつでもいい」

第6話・新たなIS（前書き）

久しぶりの更新です。

第6話・新たなIS

さて、ホテル・アグスタに行つてから数日が経つたある日。訓練場に立つてる二人人…もとい二機がいる。一つはオレンジ色を基調にしたもの、もう一つは青を基調としたものである。

そう、言わずともわかるだろうがティアナ、スバルがISを装着しているのだ。何故ティアナとスバルISを持っているかと言つとそれは昨日のことだった。

「あゝいいなIS。私も欲しいな」

「アンタ何言つてるの？」

訓練の休憩中。ラウラと模擬戦しているのはを見ながら地面に座つて見ていた。

「でも、あんなの僕達では動かすの大変そうですね」

「それに私、機械とか余り詳しくないので」

年少二人組も隣に腰をおろして眺めていた。

「ふふん。その事ならもう解決済みなのだ!!」

四人は後ろから声を掛けられて振り向くとそこにいたのはいい笑顔をしている束であった。

「どう言う意味ですか束さん？」

「ん〜とね。やっと完成出来たって事かな。それで何だけどスーちゃんにティアちゃんのデバイス私に貸してくれるかな？」

「この後はもう基礎トレーニングだけですしいいですよ」

そう言っつてティアナとスバルは束にデバイスを手渡すと束はじゃあね〜と言っつて隊舎に戻って行った。

「一体何だったのでしょうか？」

そして、今日の少し前の時間。訓練を始めようとする所に束がティアナとスバルのデバイスを手にして現れ、それを渡す。

「二人とも、一回デバイス起動してみて？」

二人は言われるがままにデバイスをいつものように起動させると二人は光に包まれ、次には機械的な物を纏っていた。

「「これって…IS!？」」

「そうだよ、凄いでしよう!!」

エツヘンと胸を張る束。だが、はっきり言ってこの事はあまりにも予想してない事だったのか、ISに乗ってる二人はともかく、なのはやエリオやキャロ、更に宗介やラウラまでもが啞然としているのだ。

「とりあえずはちゃんと起動出来たね。んじゃ早速テストしてみよー」

そんな呑気な声が訓練所に響いた…

「えつと…ふむふむ。この両腰にある銃はクロスミラージュと同じ要領で使えるわね。背中にあるバックパックにある対艦刀は…これは当面無視でいいわね」

ティアナは今自分の装備を確認している。ティアナのIS”クロスミラージユ”はオレンジ色を基調として所々に黒色が混じっている。両腰にはハンドビームライフルショーターに背中へのバックパックに對艦刀が二本あるのだ。この對艦刀は刀ではなく、機械的な感じな物だ。簡単に言えばソードカラミティの剣の小型版だと思えばいいだろう。

「私のはあまり変ならないような…あつ、ビームソードがある」

對してスバルのは青色を基調に白色が所々混じっていると云う感じで、見た目も右腕にあるリボルバーナックルに両足にローラーブレードがある位だ。このローラーブレードはスライド式で任意で入れ替えがでているようになってる。

「ふう、いきなりの事で俺も驚いてしまったがなんとなく状態は把握した」

「だな。私も流石に驚いたぞ」

チェックしてる二人に宗介とラウラが話し掛け、状態を確認する。

「よし、今日の早朝訓練はティアナ、スバルの二名による一対一による模擬戦を行う」

宗介の発言の後、ティアナとスバルと以外の皆は訓練所から出て二人の戦いを見る準備をしていた。

「まさかアンタとこう言った形になるなんてね」

「私もだよティア。そしてティアに勝つ！！」

「言ったわね。その言葉、そっくり返すわよスバル！！」

二人はISを構え、同時に飛び出した。ティアナはスラスターで、スバルはローラーブレードでお互いの距離を縮める。が、ティアナスバルが近接戦が得意なのは十分理解しているのでティアナは急激に上空に飛んだのだ。

「うわ…私本当に空飛んでる…」

自分に空戦の適性が無い事を知ってる自分が空を飛んでいる事に感激をするティアナであった。

「っと。感激をするのは後」

ティアナが下を見ると、スバルが先天魔法”ウイングロード”と呼ばれる空の道を出し、ティアナ目がけて走りだしていた。ティアナも両腰にあるビームシューティーを手にするとそれをスバルに目掛けて連射する。

「凄い、連射性が」

連射される魔力弾。しかしスバルは魔力弾が当る瞬間、空の道の上をジャンプして魔力弾を回避するとそのままティアナに拳を繰り出す。

「まず!!」

ティアナはとつさにバックパックにある対艦刀を抜くとそれでスバルの拳をずらす。

「うわっ、こんの!!」

スバルもとつさに右腰にあるビームソードを抜いて対艦刀を受け止めるとスバルは一旦ティアナから離れるが、ティアナがそれを只見ている筈もなくすぐに追いかけて来る。

「何か…これだ!!」

スバルは後ろに下がりながら単一の魔力弾を放ち、ティアナはとっさに対艦刀で受けるがとっさだったため体勢が崩れる。その隙にスバルはティアナ目がけてフルスピードで向かう。

「必殺：シャイニングフィンガー！！」

シャイニングフィンガー、それはスバルのIS”マツハキャリバー”のワン・オフ・アビリティの派生で生まれる技。その技は名前の通り手にエネルギーを集中させ、相手にぶつけるシンプルな技である。

スバルの右手は青色に光輝き、ティアナ目がけて右手を突き出す。

「っ！！」

ティアナは痛烈な表情をするが、次の瞬間ティアナはにやっと小さく笑い…

「あれっ…」

スバルの右手がティアナに触れた瞬間、ティアナがその場から消えてスバルは空を切るような感じを覚えた。

「残念、それは幻よ」

ティアナはそう言いながらビームライフルシューターから魔力弾を連射。容赦なくスバルのシールドエネルギーを削り0にさせた。

「あつ」

「はい、私の勝ちね」

「そこまでだ」

スバルが地面に叩きつかれ、ティアナはゆっくりと地面に降りて来る。宗介の合図により模擬戦は終了した。

第6話・新たなIS（後書き）

スバルのワン・オフ・アビリティは技の通りスーパーモードです。スーパーモードはまだ登場しませんが。それよりティアナを強くしすぎましたかな？

第7話・宗介、幼女を拾う（前書き）

皆さんお久しぶりです。本編もほどなく進んできたのでこちらを久しぶりに更新してみました。今回は題名通り、あの幼女が登場します。

第7話・宗介、幼女を拾う

スバルとティアナの模擬戦から数日が立つ。あれから宗介の訓練はISを使った訓練がメインになり、その間のエリオとキャロは東の手伝いを出来る範囲でしていた。そんなある日…

「ごめんな相良君。今からこれを地上本部に届けてほしいんや」

「はっ、了解いたしました八神隊長」

宗介は隊長室で八神はやてに報告書提出を頼んでいた。彼女自身、忙しい身だと言うのは宗介も理解しているため彼は引き受けたのである。

「それじゃあ、案内は…ヴァイス君にたのむや」

宗介は整備室に向い、ヴァイスに今の事を説明するとヴァイスは車を用意し地上本部に向う。報告書提出は難なく終えた二人は息抜きのために本部ビルの近くを散策していた。

「それにしても宗介、今日はいいい天気だな」

「ああ、そうだな…ん？」

宗介は近くのベンチ上に座っている何かと目があった。それは…五、六歳位の幼女、しかも金髪左右の目が違う以外普通の幼女、将来有望確実の幼女だった。

しかも、その幼女の首に何かが書いてある紙をぶら下げている。

「すまない。今この子を誰かに預かってほしい。詳しい事を知りたいならここに連絡をくれたまえ」

そう書いてある所の次の段に電話番号が書かれてあり。最後にB Y ジェイル・スカリエッティと書いてあった。

「なんだこりゃ？どうする宗介？」

「とりあえず連絡してみよう」

宗介は携帯を取り出すと書いてある電話番号に電話を掛ける、程なくして相手は出た。

「すまない。幼女を見つけて電話をかけたのだが」

『おお、すぐに拾ってくれる人が現れるとは。失礼、私はジェイル・スカリエッティだ』

「相良宗介だ。それでこの幼女をどうすればいいんだ？」

『君に少し育ててほしいんだ。私はある事をしていて育てることが不可能になってしまつて…』

「俺には…厳しいな」

『そこを何とかしてもらえるとありがたいのだが』

「…しかたない。引き受けよう。だが、一回お前に会わせろ、それが条件だ」

『OKだ。その事についてはおつて連絡する。それでは』

電話が切れると宗介は携帯をしまい、幼女の近くに行く。

「宗介、相手は何て言つてたんだ？」

「俺にこの子を育ててほしいと」

「はあ？お前マジで言つてんのかよ」

「仕方がないだろう。君、名前は何と言つ？」

「ヴィヴィオです」

外のベンチに放置気味にされていたにも関わらず幼女は元気よく名

前を言った。

「どくたーに言われたとおり。ずっとここにいたんだよ。二人は何て言うの？」

「俺は相良宗介だ」

「イケメンのスナイパー、ヴァイス・グランセニックだ、よろしく」

ヴァイス、それは少女にする挨拶では無いだろう…

「ここで話し合うのも意味がねえ、一旦六課に戻るか」

「そうだな」

「お〜」

二人は幼女、ヴィヴィオを連れて車に乗り込み、六課に戻る。

「ちょ…宗介。その幼女は何なのだ？」

「そうよ、アンタまさか拉致してきたんじゃない…」

「うえ…まずいよソースケ…」

「宗介さん。すぐに警察を!!」

「ちがうよエリオ君、ここは救助センターに!!」

「皆すこしおちついてって無理か。私もどうしたらいいのやら…」

「やるねそーくん。私達の考えの斜め上45度上の事を常にやってくれるなんて」

上からラウラ、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、なのは、束の順でヴィヴィオを見た感想を言ってた。

「うお…」

ヴィヴィオ、絶賛驚き中。

「で、どうするのだ宗介？」

「どうすると言われても。育てるしかないだろう」

「そうは言ってもな…」

ラウラは宗介に肩車されているヴィヴィオを見る。ヴィヴィオはごく機嫌だった。

「それに、先ほど相手方にも連絡を入れた。どうやらこの子はその間、養子になるみたいだ」

「アンタ、それマジで言ってるの?」

「しかたがないだろうランスター」

ティアナはハアとため息を吐いて諦めた感じをした。そして、肩車をされているヴィヴィオは…

「それじゃあ。私は相良・ヴィヴィオになるのかな?」

「そうなるね」

ヴィヴィオの発言に何気なく答えるスバル。多分、今の発言の凄さを理解していないためだと思われる。

「でも相良君。こんな少女を育てること出来るの?」

「なーちゃん。そこは私達がフォローしてあげればいいんだよ。それにエリーにキャロちゃんがいるし、大丈夫だよ」

「それもそうですね」

その間に、地面に下ろされているヴィヴィオはエリオとキャロと仲よく話していた。

「え〜と。そうになると…そーすけがお父さんで…おかーさんが…らつらお姉ちゃんかな？」

「………うええええええ」「……」

「は？…私がおかーさん…だと…」

「そうになると、名前はヴィヴィオ・S・ボーデヴィツヒの方がしっくりくるな…」

六人は驚き、ラウラはあまりの事に頭の回転が回らないでいたが、宗介はふむと言った感じで考え込み…

「真剣に考えるな!!」

「いたいぞラウラ」

ラウラにハリセンで頭を叩かれた。

「えつと…そーすけお父さん。らつらおかーさん。これからよろしくお願いします」

そんなカオスな空間に、
幼女は可愛い声で二人に挨拶したのであ
った。

第7話・宗介、幼女を拾う（後書き）

なんかもういろいろとカオスにしすぎちゃってますね（笑）

今回の話は本編にも影響してきますので本編の方もよろしかったら読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4248t/>

魔法少女フルメタルなのはストラトス・ふもっふ！！

2011年10月22日02時20分発行